
転生者は過負荷and異常のチートですはい。

マイペース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は過負荷 and 異常のチートですはい。

【Nコード】

N7339V

【作者名】

マイペース

【あらすじ】

よく色々な作品をよみますが、考えてしまう事があるんです。

『このシーンに球磨川くんがいたらどうなるのかなあ？』

・・・書いてしまったよ・・・

反省文この文。後悔はしてない。『めだかボックス』の世界に転生していた主人公が寿命で死に、今度送られた世界はなんと『魔法先生ネギま』の世界！！

そんな作品。

— 楔ちゃん、子供にデレデレなんだよなあ。 — (前書き)

勢いで書いてしまった。だって仕方ないじゃん！弟がいきなり『ネギまのSS、書かないか？』

なんて言われたら書いてしまった。

では、新製品、「寿命で死んだ転生者は過負荷 and 異常なチート」
始まります。

――楔ちゃん、子供にデレデレなんだよなあ。――

・・・・・・オレは、二回目の死を体験した。

最初の死に方は子供を車から助けるために死んでしまったが、今回はちゃんとした寿命で死ねた。

「やあ？またここに來たんだね？」

そして今居る場所は満面白の空間にパイプ椅子がふたつある空間。

一つには俺が座っているが、もう一つには。

「どうだった二回目の人生は？まあ、君が言った通り『めだかボックス』の世界に送ったけど、よく生き長らえて、ここまで死んでくれたね？」

十人中、十人が振り向く美貌。すらつとした体型。さらつとした長髪。頭には『安全第一』と書かれたヘルメットを被っているのが印象的な『神さま』だ。

「いえ、最初の死に方は『神』のせいだけど、今回は寿命で死ねた

から満足だし、馬鹿みたいな化け物どもと会えたしな」

「そんなとこ悪いんだけど、君にはもう一回別の世界に転生して貰いたいんだよ？」

「・・・因みに聞くけど何処の世界に行くんですかね？」

「うふ。君も知ってるでしょ？『魔法先生ネギま』に行ってもらいたいんだ！」

「別に良いけど、前の世界で使えた『異常』と『過負荷』は使えるのか？」

因みにオレはめだかボックスの世界に送られるときに、異常、天災、と、過負荷、負等生を貰ったのだ。

「うーん？それも良いんだけど、それ以外にも使ってみない？今だったら頸動脈出血大サービスで『めだかボックス』のキャラクターの『異常』と『過負荷』、全部でも良いんだよ？」

「大丈夫かよ！？それやりすぎじゃね！？」

「良いんだよ。どうせ原作ブレイクして貰うんだから?。」

「マジでか!?!うん……よし!なら良いです。」

「よし!じゃあ、特典として容姿を球磨川にしますよ?。」

「楔ちゃんの!?!まあ格好いいから良いけど……。」

そう言えば楔ちゃんは財部ちゃんと結婚して、子供見せに来てから見てないなあ……。

「じゃあ能力を与えるからこっちに来てくれるかな?。」

そう言われたから俺は神である彼女に近づいた。

チュッ。

「はい。『天災』と『負等生』は返して貰ったからね?その代わりに皆の『異常』と『過負荷』を君にあげたからね?。」

やっぱりキスなんですわかります。

「じゃあ、世界に送るからね?」

そういうと足元に穴が開いて、俺は重量に逆らえず落ちていく。

「やっぱりこんなかよお!?!」

人生で三回目の世界に俺は・・・いや、『僕』は旅立った。

「今度はどんな結末を見せてくれるのかな? 人類最低の転生者・・・

」

その白い空間には微笑む神が一人居ましたとき。

— 楔ちゃん、子供にデレデレなんだよなあ。 — (後書き)

次回は昼に投稿するよ。感想やら提案よろです。

ドレミファソラシドッキングー！

「くそお！前の世界の時もそうだったけどやっぱり落下オチかよお
！！！」

そう。現在俺は上空1200メートル位をノーバンジーをさせられているのだが・・・正直言つと死ぬる速度を出している！！！！

「やばいやばいどうしよう！？」『大嘘憑き』で痛みを・・・いやいや！前提で痛いから！！」

下を見てみれば校庭見たいなものが広がっていた。目測だがもう地上まで後600メートル位だろう。

「畜生っ！仕方ない江迎の『荒廃した腐花』で地面を腐らせて・・・
って！？あれ！？」

地面を腐らせてクッションにしようとしたら丁度俺の落下地点に誰かいる！！！！

「……ん？よく見たら頭が化け物みたいな野郎だな……ま、まさか妖怪「ぬらりひょん」なのか！」

「だったら！悪霊退散だ！」

目測で大体100メートルになった時、彼方も俺に気付いたようだ。

「うおっ！？なんじゃなんじゃ！」

最初はびっくりしていたが俺の落下地点から段々と離れて行った……だが！

「さあせえるかあああ！」

俺は空中で身体を回転させ落下地点をズラし、やる事は一つ！

「ラアアイダァー！キイックウウ！」

「ふっ！」

俺のキックはぬらりひょんの後頭部に直撃しぬらりひょんは地面に顔面から突っ込み悶絶している。

「お、お主い！何をするんじゃ！！」

ぬらりひょんは鼻を押さえながら俺に言いやがった。

「くそつ、まだ生きてやがったな化け物め。今から成仏させてやる
う！」

俺は何処からか図太い螺旋をぬらりひょんに突き付けた。

「ワシは化け物じゃなああい！この学園の学園長！れっきとした人間じゃあああ！」

「へっ？」

「まったく・・・最近の若者はこれだから・・・」

今現在俺は学園長室のソファに座っている。

状況を説明すると、学園長は後頭部にあり得ないくらいデカイ絆創膏を貼っていて年甲斐も無くぶんぶんしている。

そして、俺がなぜ上空から降ってきたわけを聞くために俺は学園長室に連れてこられている。

「して、お主はなぜ上空から降ってきたのじゃ？」

「そんな事よりお茶を下さい。今すぐに、何せここに来るまで上空から落下したり歩いたりで喉が乾きました。」

「お主は遠慮を知らないのかの・・・まあ仕方ないのお・・・」

ぬらりひょんは椅子から立ち上がり部屋に備え付けのポットでお茶を作り始めている。

・・・さて、それじゃあ取り敢えず現状把握だ。

今思い出したけど、このぬらりひょん、確かネギの生徒の近衛木乃香の祖父・・・どこら辺に血の繋がりが？

それに時代なのだが、原作の一年前なのだ。

さつき学園長と学園の中を歩いた時に原作キャラが一年のクラスに居たのだ。

まあ、原作ブレイクするのなら都合は良いかな？ 実際ネギの性格改善なんかマンガ読んだときに考えてたからな・・・

「して、改めてじゃがお主はどうして空から落ちてきたんじゃ？」

お茶を俺の目の前に置き、自分の椅子に座るぬらりひょん。

「うーん？ そうですね。スカイダイビングしようとしたらパラシュート忘れてたからじゃ駄目ですかね？」

「なるほど、言えないんじゃない・・・して、服装から見て高校生じゃそうだが、学校は何処なのじゃ？」

因みに服装は楔ちゃんが学生の時に着てた学ランである。

「学校は・・・裸足でラーメンを食べてたから廃校になりました。」

「うぐっ、これも駄目かの・・・なら名前だけでも教えてくれないかのぉ？」

そうだな、実名でも良いけど、この容姿だし名前変えてもいいかな？

「名前は球磨川。球磨川^{くまがわ}楔^{みそぎ}と言います。」

「お？名前は教えてくれるのか。して、楔殿はこれからどうするのかの？」

「そうですね？この学園の敷地が広いから約90坪の段ボールハウスでも作ってバイトでもしようかと・・・」

「やっぱり楔殿は遠慮を知らなのぉ。だったらこの学園で働かないのかの？それだったら住む場所を提供するかの？」

「アレ？良いんですか？僕みたいな身元不明な人間を雇っても？因みに戸籍すら有りませんよ？」

「オーホッホッ。大丈夫じゃ。それ位ならすぐに作れるからの。それにお主、裏に関わりがあるじゃろ？」

なんと！？戸籍すら作れるのかこのぬらりひよんは！？

「裏には関わりは在りませんが力は有りますよ？そんなんで良かったら雇っても良いですよ？」

「よし。ならお主には1年A組の副担を任せようかの。教科は何が良いじゃろうか？」

「おいおい、学生に副担任せていいのかよ・・・まあいいや。教科は数学をやりたいのだから？」

「かまわんよ。なら今日の夜に力を見せて貰うのだが良いかの？」

「大丈夫ですよ。ズズッ。あっ？このお茶、美味しいですね？」

「そうかの？茶の味がわかるのなら良かった。して、楔殿は出来るのか？」

そついいながらぬらりひよんは俺に囲碁板を見せてきた。

「ええ、出来ますよ。やりますか？」

「そうじゃな、ではよろうかの。」

タカミチSIDE

授業中に学園長から念話で呼び出しが来たので、授業を他の先生に任せて学園長室に来たのだが。

「・・・・み、楔殿・・・・わ、ワシ。石置けないんじゃないけど・・・」

「当たり前じゃないですか？そういう風にしたんだから？」

ドヤ顔の学ランの青年と半泣きの学園長が居た。

なんだかタカミチって勝ってないよね？（前書き）

なんだか色々な作品ではオリ主が『ネギま』の世界に転生すると。

圧倒的なチートでタカミチを蹂躪している乃ですが。この作品でも

—— もれなくです。

感想やら提案、はたまた使って欲しい「異常」や『過負荷』などもしくは新しい『過負荷』や「異常」も募集してます。

楔「いや、流石に新しい能力は不味いだろ？」

作者「大丈夫だよ。だって僕らには一京のスキル所持者が居るんだぜ！怖くねえよ！！」

そんな無謀にも挑戦するのでどうぞよろしくお願いします。

なんだかタカミチって勝ってないよね？

ぬらりひょんを囲碁で蹂躪し、その後将棋、チェス、オセロ、モノポリー等の盤面ゲームでも圧勝した。因みに途中で参加したタカミチにも圧勝し、時間をキングクリムゾンし。

「はい。夜です」

「み、楔殿はなに独り言を言っておるのじゃ？」

只今時刻は12時になりかけている。

俺は学園長とタカミチに連れられて世界樹の前の広場に集められた。

広場には数十人くらいの生徒、先生がいた。

「うぬ？呼んだのはもう少し少なかったはずなのじゃがのぉ？」

「学園長。多分楔くんを見たさに面白半分で見に来たのでしょう。学園長直々の推薦ですからね楔くんは……」

ぬらりひょんは呆れながらいい、タカミチは苦笑しながら言った。

「大丈夫ですよ近衛さん。どうせ俺みたいなのを見ても面白くないだろうし、能力も見られても『誰にも理解』されないですからね」

「まあ、楔殿が良いのだったらいんじゃないかな・・・では、自己紹介をもらうかの。」

「わかりました。」

ぬらりひょんにいわれ、俺はポケットからマイクを取出し（宗像くんの暗器って便利！）、こう高らかに宣言した。

『えー、初めまして？モブキャラの皆さん』

グシャッ！

今盛大に心が碎ける音がした。

『どうしました個性なきみなさん！怪我はありませんかその他のエキストラのみなさん！気分がすぐれないなら早く帰った方が良くですよもう出番が望めないみなさん！』

「「楔くん（殿）！！！！！！！！」」

タカミチと近衛が俺の学ランの襟を掴んできた。「どういう事じゃ！楔殿のスピーチの所為でみなのが折れてしもたじゃないか！！！！」

「そうだよ楔くん！！！！君と戦う筈だったガンドルフィー二先生まで心が折れて駄目に為ってるじゃないか！！」

「そ、そういわれましても！？俺の先輩が『スピーチする時はね——』って教えてくれて……」

「その先輩はくそじゃのおお——」

「が、学園長落ち着いて！ほ、ほらちらほら大丈夫な人が居るじゃないですか？」

見てみると数人は大丈夫だったのかちゃんと立っている。

「バカモおおン！そうだとしてもちゃんとした自己紹介をしておればこっちはなつとらんかったわい！！」

「……はぁ……仕方ありませんね。学園長。僕が楔くんの相手になりますよ。」

どうやらタカミチが戦うらしい。確か原作通りだと、居合い拳^ゝなんてもん使ってたような気がするなあ。

「うむ。まあよかろう。だがしかし、まずはこやつらを片付けてからじゃな。こら楔殿も見とらんで手伝え！」

戦う前にさっき心が折れて立ち直れない人たちを隅に運んでいった。

そして距離を置いて対峙するタカミチと俺。

「ちなみに楔くんは武器とかは持たなくて良いのかい？見たところ魔法の発動体すら見えないけど……」

そついい、タカミチはポケットに手をつ込んだ。

「いえいえお気遣いなく。俺の能力は武器とかはそついうのは関係ないんですわ？」

俺も真似をしてポケットに手をつ込んだ。

「おや？楔くんはポケットに手を入れてどうしたんだ。やっぱり武器でも隠し持つてるのかい？」

「別に意味なんかありませんよ？ただ、俺は親友の『勝つ時は態度悪く』を実演してるだけです。そんな戯れ言はさておき始めましょうよ？」

「そつだね。じゃあ、先攻は貰うよ。」

ヒュッ――

風を切る音が聞こえる頃には俺は吹っ飛んでいた。

「ガハッ！」

やはりタカミチも場慣れしている。拳、詳しくは拳圧をあてたのはちょうど肺がある場所。肺からすべての酸素が出てきてしまう。――

――
だけど
――

「か、かはっ！……いやあ、タカミチは凄いな？あんなだけ距離があつたのに拳が当たるなんて考えても見なかったよ？」

蛾ヶ丸ちゃんががまるの『不慮の事故』エンカウンターで痛みを地面に『押し付け』れば立つこと位は出来るんだけどね？

「あ、あはは。まったく聞いてないようだね楔くん。そこまで威力を抑えたつもりは無かつたんだけどな……」

「いえいえ大丈夫です。タカミチ。貴方の拳はちゃんと俺の肺に当たってダメージはありましたよ。だけど、俺も久しぶりの戦闘です。頭から出るアドレナリンが痛みをどこかに『押し付け』たんでしょうね？」

流石にタカミチは驚いているらしい。

奇襲。しかも自分の十八番の「無音拳」をモロに受けてもなお、悠々と立ち上がっているのだから。

「……なら、君にもつと痛い一撃をかましたから君は痛がつて

くれるかな？」

そついいタカミチはポケットに手を入れようとした。

「タカミチ。残念ながら貴方には次は無いですよ？・・・だって。」

タカミチの「居合い拳」はつまり拳を刀に模し、居合い切りの要領で拳圧を飛ばすもの。

つまりは——鞘が無ければ居合い切りは撃てない。

「タカミチのズボンは履か『無かった』事になってますからね？」
つまりはズボンを消せばいい話なのだ。

「！！！！ば、馬鹿なっ！？い、いつの間にか！」

タカミチは下半身の違和感に襲われていた。

だって、ズボンが無いんだもん。

「さて、どうしますタカミチ。俺はまだ力を半分、いや、一京分の1も使っていませんがまだやりますか？俺が本気を出せばタカミチ

は途端に真っ裸確定になりますか？」

「やめてくれえええ！！観客の生徒の中には担任の娘も居るんだ！真っ裸だけはやめてくれええ！」

タカミチは土下座しそうな勢いでこちらに頭を下げてきた。

いや、その頭を下げるのも醜いだろうよ？

「なら仕方ねえな。おい、近衛？これで終了だけど良いか？」

「う、うぬ・・・本当はまだ続けて欲しいところじゃが・・・そうすると高畑先生の性癖がバージョンアップしそうじゃしのう。よし、勝者、球磨川楔殿じゃ。」

顎に手を当て考えた近衛だった。まあ、このまま突き進めばタカミチは完全に露出狂の仲間入りだしね。

「ふう～終わった。じゃこれは返すな。流石に冬前とはいえきついだろうしな？」

俺はズボンをタカミチに帰した。

えっ？どこから出したって？ご都合主義だよ。

「で、近衛。俺はどこで寝れば良いんだ？」

流石に日付が変わったから眠くなっても仕方がないだろう。

「そ、それなんじゃが……実は……こ、この娘の家に居候しと貰おうかと……」

近衛がモジモジしつつ指を刺したのが。

「なっ！？おいジジイ私はそんな事しらんぞ！？」

ロリがいた。

たった600年、されどロリコン！（前書き）

——はい、バイトまで後6時間のマイペースです（。・ω・。）

こんな時間に投稿するなんて生活時間が狂ってきてるなあ？

まあ、そんな事してるから毎日投稿が出来てるんだけどね？まあ戯れ言だけどね。

今回は、『家族分』『イジリ分』『茶々丸分』が多く含まれているので、皆様、パソコン、はたまたケータイの隣に自薬と『しそペプシ』を常備の上、ご観覧下さい。

感想やら意見、はたまた新しい『過負荷』や『異常』を募集中でありますう（はあと）。

では、どうぞご賞味ください。

たった600年、さねどロリコン！

近衛が指を差している方向に居るのは・・・

「おいジジイ！？私はそんな話はきいておらんぞお！？」

近衛に今にでも飛び掛かりそうなるりっ娘だった。

「おい近衛・・・」

「な、なんじゃね楔殿・・・ち、因みに文句は受けつけんぞ！」

「チエンジでお願いします。」

「・・・はっ？」

ろりっ娘と近衛はきよとした顔をしていた。

「俺はね、最も愛想の良い娘の方がいいんだ。しかもグラマーなら尚もよし！だが、この娘は……おれのGoogleには検索出来ないんだ。」

「な、ななななあああ！なんだとキサマアア！」

さっきまで近衛に突っ掛かっていたろりっ娘が今度は俺の首を掴もうとしていた。

だが残念かな、身長的なサムシングで届かない。

「それに駄目じゃないか？こんな時間に子供が起きてちゃ？どうしたんだい？寝れないのならお兄ちゃんが隣で童話でも読んであげようか？」

「それとも温かいミルクでも作ってあげようか？どちらにしてもこんな時間にお外に出てちゃいけません！」

俺はまだ俺の首を掴もうとして背伸びをしながら「うーうー」言っているろりっ娘の肩に手を置きながら言った。

「私は子供じゃなあああい！」

「そうだよな。背伸びしたいよね。だけどね？こんな遅い時間に大声出しちゃ駄目でしょ？皆に迷惑かけちゃうからね？」

まったく最近の子供は躰しっけがなっていないなあ。こんな時間まで子供を起なこしておいて、尚な且つ深夜に絶叫をする。

まったく。

「俺はキミをそんな娘に育てた覚えは無いよ？まったくお父さん恥ずかしくて外を歩けないじゃないかあ。」

俺は泣き真似をしつつ、顔を覆った。

「えっ？ちつよ？わ、私は・・・そ、そんな気は・・・。」

いきなりの展開でどうやらろりっ娘は混乱している。

や、ヤバイこの娘っ!?

前の世界の『飛沫』ちゃん並にイジリ甲斐があるっ!。

「・・・そうですよマスター。私もマスターを見ていて恥ずかしくなりました。」

そこにさっきまでろりっ娘の傍にいた長身の女性がろりっ娘に追撃をした。

「なっ!?!ち、茶々丸まで悪ノリ!?!」

「そうだよ。お母さんだってそう言っているんだよ？これからは・
・家族みんなで、がんばろ？」

「もうなんなんだよおお！！！！！！」

夜中の世界樹に響いたのはろりっ娘の絶叫だった。

「いやあゝ。茶々丸の紅茶はおいしいよ。あっ？おかわりお願いで
きる？」

「かしこまりました『楔様』。」

「だから『様』づけしないでいって言ってるじゃないか？」

「で、では……わかりました『楔さん』。」

「おい貴様等。人の家でなにイチヤイチャしているんだ？それと楔
は遠慮を知らないのか？」

「何を言っているんだキティ？俺はこれからここに『住む』んだよ

？だったら遠慮しなくても良いんだよ。」

さっきの絶叫から数分後。あれからキティは駄々をこねたが、茶々丸につれてこられて、ここ、キティの家に着いた。

家に着いて再度自己紹介をしたのだが、俺は相手の名前を見る異常『ダウト・アンド・ネーム探巡明解』を発動させ、「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」のA・Kの部分を見抜き、キティと呼ばせてもらっている。

「まったく。とんだ抱えモノを掴まされたよ。コレでも私は600年生きた『真祖の吸血鬼』茶々丸は魔力で動く『ガノイド』、貴様は恐れないのか？」

「はんっ！たかが『吸血鬼』と『可愛いお嫁さん』に誰がびびりますかい？」

「わ、私がお、お嫁さん……」

ぷしゅーと、頭から蒸気が出てますよ茶々丸さん。

「なっ！？き、貴様に茶々丸は譲らんぞお！」

「大丈夫です。譲って貰わなくても。ちゃんと茶々丸の意志で惚れさせますから。」

「だからそれをさせな——」

「マスター。これまでお世話になりました。これからは『くまがわ球磨川茶
ぢやぢやまる々丸』として、生きてきます。」

「だから茶々丸も悪乗りするなあああ！」

「「キティ（マスター）、五月蠅いよ？（お静かに）」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ショボーン。」

いじりすぎたのか部屋の隅に縮こまっているキティに萌えたのはこ
こだけの話。

「で、楔に言いたいことがある。」

なんとかキティの機嫌を直さして、テーブルを挟み、椅子に座っている。

「ん？なんだい。」

「マスター。邪魔しないでください。」

「茶々丸は何故楔の膝に座っているんだ！？」

「まあまあ、そう怒らない怒らない。ほら、キティが何か言いたげだから茶々丸は少し退いてくれる？」

「はい。分かりました楔さん。」

茶々丸は俺の膝から離れて隣の席に座った。

「っで、キティは何を言いたかったんだい？」

「くっ、貴様と喋っていると調子が狂う。話と言つのは『家賃』の事だ。」

沸点五秒前になっているキティは我慢しつつ、言ってきた。

「家賃？それは幾らくらいかな？」

「いや、残念ながら金じゃないんだ。私が欲しいのは貴様の血だ。」

「・・・それは良いんだが、一つ聞いていいか？」

「うん？なんだ。」

「なんでキティみたいな600年生きた吸血鬼が学校に通っているんだ？」

カチッ！

その言葉がスイッチになった。

「それはアイツのせいだあああ！……！！……！！」

「成る程、キティはそのナギって奴に「登校地獄」つつ呪いをかけられて学校に通っていると・・・」

「そうだっ！アイツの所為で私はこんな中学生にならずにちゃ行けなくなっただなあ！」

俺はさっきまでのキティの話を聞いて――

下衆な笑みを、そして面白い事を浮かんだ。

「なあ、キティ。」

「ああ？なんだ楔よ。早速だが血を貰いたいところなんだが。」

どうやら色々思い出して怒っているらしい。

まったくキティよ。そんなにテーブルに身を乗り出して足を乗っけたら下着が見えるよ？

「その登校地獄、消したあげよつか？」

「なにっ！？消せるのか！？」

俺の言葉を聞いてテーブルを歩き、俺の傍に来たキティ。

「ああ、消せるよ。だけど、その為にはある事をしないといけないんだけど大丈夫かな？」

「なんだ！？言ってくればやってやるさ！」

どうやらキティはテンションが上がっているのか、生返事になっている。

「それはね、
■ □ ■ □ ■ □ ■ を ■ □ ■ □ ■ だよ。」

「！！！！み、楔はそんな事が出来るのか！？楔は何者だ？」

「俺はね、人類最強であり、最低であり、そして平等なチートだよ。まあ戯れ言だけどね。」

まあ、驚くはな、そんなことが出来るのか、だけど俺には出来るん

だよ。

「・・・フツ。フツハツハツ！面白いな楔！クックク、なら早速やってくれ！」

そう言うとキティはテーブルから飛び降り、両手を広げている。

「うん。じゃあ行くよ。」

ゴスッ！――

俺はキティに螺子を突き刺した。

たった600年、さねどロリコン！（後書き）

ではでは、請負人の『マイペース』でした。

またのご来場をお待ちしています。

——正義と『征偽（せいぎ）』は使い方——（前書き）

——皆さん。とりあえず名言を言わせて言わせて下さい。

「正義の反対はな、また違う正義なんだよ」——野原ひろし。

正義の観点は人それぞれですが、このひろしのセリフは感心しました。

今回の話は『ガンドルフィーニ分』と『めざましテレビ分』と『正義分』を多く含んでおります。

皆様、ご注意ください。

感想やら意見、書いてくださるとテンションが上がります。

―正義と『征偽（せいぎ）』は使い方―

「5時25分！5時25分！」

テレビから聞こえる声は目覚まし時計がモデルのキャラクターが時間を知らしている。登り始めた太陽が窓を通して部屋を照らしているこの時間。

「貴様は一体何をやったのかわかっているのかぁ！」

そんな時間に俺は学園長室に呼び出しを食らっている。

「さぁ？俺は何か悪いことをしましたか？ガンドルフィーニ先生？」

今ここにいるのは俺、学園長と魔法先生が10人程いる。

「しらばつくれる気か？お前はあの「闇の福音」の「登校地獄」を解除しただろうが！」

ガンドルフィーニ先生？の隣に居る男性教師が言い放った。

「はい。解除しましたよ？だってあの『登校地獄』は三年契約だったんですよね？だったら良いじゃないですか。」

「そういう事ではない！せっかく『首輪』を付けた『化け物』を貴様は解き放ったんだぞ！」

「化け物？そんなこと言っては駄目ですよ？」

「どれだけ手から血の匂いがしようが、どれだけ人間を殺していようが、どれだけの罪を重ねていようが、この麻帆良学園の誇る生徒の一人ですよ。」

「『差別するなよ。』」

「『………』」

まったく、こんだけの人間が揃っているのに反論の一つも出来ないんですか。

こんな『正義』の『紛い物』、『征偽』にキティは13年も縛られていたのかよ……。

「では、ガンドルフィーニ先生。貴方には幼稚園に通っている娘さんが居ますね。」

「なっ！？なんで君が僕の家族の事をつ！？」

まあ、調べ尽くしましたからね。『もしかしたら』こういう『事態』
イジメ
があるかも知れなかったしね。

「では、今から俺の『異常』
スキル
、『欲求不満』
ハンター・エンター
でキティと同じ、『人間』をみたら吸血をする『吸血鬼』にしてきてあげましょう。」

「！！！！」

「そんな『化け物』が居るんだったら、俺は『人脈』を使って討伐部隊もむかわせましょう。それも女子供を殺すのに躊躇がない『殺スアーミー』
スアーミー
部隊』を送りましょう。」

「やり過ぎでは有りませんよ。だって貴方の娘さんは、『化け物』
「
なんだから。」

「こうして、『悪の吸血鬼』は滅びますね。ガンドルフィーニ先生の『娘（化け物）』を討伐した俺はみんなから『英雄』と言われるでしょう。」

「……ぼ、僕はそんな事はさせない。」

ガンドルフィーニ先生は苦虫を噛んだような顔をしている。

「おや？身内になつた途端に対応が違いますね。」

「そうだよ。他人の『過^{マイナス}負荷』は身内に起こらないと分かりにくいですからね。」

「俺はガンドルフィーニ先生にはキティが受けてきた『過負荷』を分かつて貰いたいですから。今から貴方の娘を『吸血鬼（化け物）』に変えてきます。」

「『今すぐに』」

「や、やめてくれ……。娘だけには手をださないでくれっ……」

ガンドルフィーニ先生は半泣きになりながら俺に懇願してきた。

「あはっ！大丈夫ですよ。やりませんか？どうしたんですかガンドルフィーニ先生？目から涙が出てますよ？」

ボキッ！

ガンドルフィーニ先生は膝をつき口を半開きにしながら白目になっていた。そう、ガンドルフィーニ先生の心は『折れた』。

「……………はあ。楔殿、やりすぎじゃよ。」

「「「「「……………」」」」」

近衛がため息をつきながら言ってきて、他の魔法教師は黙りこくっていた。

「仕方ないじゃないですか近衛。間違っている『正義』を俺は正しただけですよ。」

「……………うぬ。そうじゃが楔殿。楔殿の理論じゃ、『エヴァ』は楔殿が『殺す』べき『吸血鬼（化け物）』じゃぞ？」

「ああ。大丈夫ですよ？だってキティは——吸血鬼では『無い』ですからね。」

そう、俺は昨日、『大嘘憑き』で『登校地獄』と『吸血鬼』をなかつたことにした。

「つまり今のキティはただの『600歳』を生きた魔法使いで、『膨大な魔力』を持ったただの女子中学生ですよ。」

「……………はあ。もうわしは楔殿には驚かんよ……………」

「では、俺はそろそろ職員室に行かせてもらいますよ。今日は俺の初仕事なんです。遅刻なんて持つての他ですからね。では、また会いましょう『征偽の魔法使い』さん方。」

俺は『征偽』の『魔法使い』を尻目に学園長室をあとにした。

「アハハ、楔くんは何でもアリだな……………正直な感想僕でも引いてるよ……………」

「そんな事言わないでくれよタカミチ？俺はただ『キティ（家族）』を助けたかっただけなんだからな。」

職員室にいき、全先生に挨拶を済ませ（朝にあつた魔法先生は冷や汗をかいていたな。）、今はタカミチと自分のクラスに向かっている。

「まあ、僕のクラスは愉快的クラスだから楔くんもすぐに仲良くなれるよ。」

「それは良いんですけど、良いんですか？スーツじゃなくて・・・」

そう、今の服装は昨日から変わらない学ランなのだ。

「学園長に聞いたら「学ランの方が親しみやすい」から大丈夫だそうだよ？」

「まあスーツは着ぐるしいから、良いんですけどね。」

「僕も楔くんはスーツじゃなくて学ランの方が似合ってるから良いと思うよ？あっ！そうだ！出席簿を渡してなかったね。」

タカミチが自分が持っていた、出席簿を俺にくれた。

「じゃ僕は先に教室に入るから合図を出したら中に入ってきてね。」

どうやら話しているのに夢中になっていたらもう教室に着いたらしいい。

「わかった。っと、その前にタカミチ？」

「なんだい？楔くん？」

「『結婚指輪』って言うてくれますか？」

「・・・・・・？結婚指輪？」

タカミチは頭から？（クエスチョンマーク）を出しながら言った。

「はい大丈夫です。ありがとうございますタカミチ。」

「????・・・・・・じゃ合図があるまで待ってて。」

タカミチは教室に入っていて、そして俺は学ランの内ポケットから『黒い箱』を取り出して作業をはじめた。

―タカミチは超兄貴でもやってな。―（前書き）

どうも好きな『ナナ』は、「水樹奈々」と「木の実奈々」のマイペースでし。

いやあ、皆さん。この作品を書くに当たって、『刀語』の原作と『戯言シリーズ』を買いはじめましたよ。

面白いの一言につきますよ。だが、虚刀流はこの作品には出さない（これ絶対）。

ネギま35巻。読みましたか？あれだとこの先続かないでしょ。誰がネギくんに勝てるってんだよ・・・

感想やら意見、はたまた読者さま方の『創造力（厨二魂）』から生まれた『過負荷』や『異常』をお待ちしております。

では、喜劇をお楽しみください。

――タカミチは超兄貴でもやってな。――

「楔くん、入っておいで。」

あれから5分くらいたった今。

タカミチからの合図が来た。

ガラッ――

教室へのドアを開けて辺りを見渡す。

「（うーん。やっぱり女子だけだね。まあ女子中だから仕方ないけどね。）」

『（それに異常（才能）や過負荷（欠点）の素質を持つてるやつまで……）』

そう、このクラスには才能や欠点を持つものが居る。まあ箱庭に通ったときよりはマシだけどね。それに昨日いた魔法生徒も数名いた。

ここまでの思考時間約一秒。俺は教卓に歩み、教卓に着くと両手を教卓に着き。

『どうも。エヴァンジェリンの元カレにしてタカミチの今カレの球磨川楔くまがわ みそぎです。』

『今日からこのクラスで数学を教える事になりました？皆さん。仲良くしてね？』

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

クラスの大半が、啞然としている中、先ほど話題になったキティとタカミチはワナワナと身体を震わせている。

「「み、みみ、楔くんいい！！！！」」

「「「「「「「「か、格好いいいいー！！！！」」」」」」

どうやら楔ちゃんはカッコイイらしい。良かったな楔ちゃん。

そして沸点を振り切っているお二人さまは顔を赤くさせながらこちらに歩み寄ってきた。

「・・・高畑先生の・・・高畑先生の・・・高畑先生の・・・カレシ」

おや？なんだか一人だけひどい空気の女の子がいるけど？・・・まあ俺は『悪くない』からいいか。

「おい楔い！さっきの言い方は何なんだあ！」

「そうです楔さま。私との関係は・・・遊びだったんですか・・・」

「

「楔くん！？僕が一体何をしたっていうんだい！？」

言い終わりに来たキティとタカミチと（いつの間にか来た）茶々丸が頭に十字マークを出しながら詰め寄ってきた。

「はいはい。落ち着いて落ち着いて？ここからは私、あさくら かずみ朝倉和美が仕切らせて貰うよ！」

俺の目の前の三人（正しくは二人と一機）を押し退けてメモ帳を持つて来たのは、この学校の「文屋」ババラッチ朝倉和美である。

「楔先生に聞きたいことは私を通してもらおうか。」

歩いてきて、俺の隣に着いた朝倉はメモ帳を開き、みんなに質問の催促を شدした。

「はいっ。質問でえす。」

「ん？どうしたんだい。ええーと、しいな さくら椎名桜子」

元気よく拳手をしたのは原作で有名な「ラッキーマン」の桜子だった。

[illegible]

「もうヤメテエエエ!!!」

クラスの女子が歓声をあげ、タカミチは膝を地面につき、うなだれている。

もうやめてあげるか。

「——というのはもちろん冗談なんだけど、あはっ！ごめんね
タカミチ。今度タバコ買ってあげるから許してね。それにエヴァン
ジェリンさんもごめんね。こんどトマトジュースでも送ってあげる
から許してね。」

「許せるか！」

「あつ？ そうだったね。何故学ランなのかだったかだよ。本当はこれ以外に服、持っていないんだ？」

「人の話をきけえええ！」

うぬ？二人がうるさいな。全くキティは新しい先生が来たから『興奮』しても仕方ないけど、教師のタカミチがそんなじゃだめじゃないか。まったく。

「フムフム、なるほど。他には質問は？」

そしてブン屋の朝倉ちゃん。そろそろ授業しないとマズイんだけど・

「はい！わたしわたし！」

元氣よく拳手をしてきたのは、身体からでる姐御感、眼鏡と羽ペンが似合っている。

「はい。なんだい？ゴキブリさん」

「誰がゴキブリじゃああ！私には早乙女はやつめハルナ、通称パール様つつ偉大な名前があるわい！」

ん？どうしたんだろう早乙女ちゃんは？君のその触角がゴキブリみたいだから……。あ。やっちゃった。

女の子にゴキブリは無いわなあ……

「まあいいや、じゃあ聞きます楔先生。」

額から十字マークが無くなった早乙女ちゃんはこついった。

て。
」

そして俺の教師生活は始まった。

――タカミチは超兄貴でもやってな。――（後書き）

では、どうもマイペースでした。

—好きな作者は東尾維新ですはい。—（前書き）

最近「どこでもいっしょ、学校に行こう」にハマっているマイペー
スですはい（。・ω・。）。

トロたちにめだかボックスを教えてあげたら『けど、最後に真の魔
王・西尾維新にみんなやられたニヤ』と告げるトロ。

なぜだろう。何故だか納得できるラストである。西尾維新さんがラ
スポスって勝率何%だよ（笑）

感想やら意見、誤字脱字など、はたまた皆さんが考えたスキルなど
が有りましたら続々書いていってください！！！！お願いします（土
下座）

それと作中での楔くんの「」と『』の使い分けは「」は普通の時、
『』は真剣な時に使用するとします。

—好きな作者は東尾維新ですはい。—

あれから放課後。

それまでに昼休みや中休み等での質問攻めでクタクタだよ。

「はあ、初日から疲れたあ……って、あれ？宮崎ちゃん？」

今俺は学校外の広場を歩いていたのだが、目の前20メートル先に見える階段から大量の本を抱えて降りてきたのは俺のクラスの宮崎ちゃんだった。

「って、おいおいあんなに本抱えて前が見えてないだ——」

と、思った矢先に宮崎ちゃんは期待を裏切らずに階段を踏み間違え、落下しそうになった。

「きゃあああああ——」

「って、駄目だよ宮崎ちゃん。女の子がそんな声出しちゃ？みつともなくてお嫁さんになれなくなっちゃうよ？」

「・・・・・・・・えっ？」

俺は落下する宮崎ちゃんを確認してから、空洞くうどうちゃんが一時期使用（課せられた）していたスキル。『光化静翔テーマンダ』を使用。一瞬で宮崎ちゃんと抱えていた本を回収し、階段を降りていた。

「・・・・・・・・え、く、球磨川先生？わ、私転びませんでした？」

どうやら宮崎ちゃんは驚いているらしい。そりゃそうだ。転んだはずなのに『立って』いて、『階段を降りている』のだから。

「そうだよ。俺が助けなかったら今頃そこら辺にでも寝てただろうね。」

「まったく、宮崎ちゃんみたいなひ弱そうな女の子がこんなに沢山の本を抱えて階段を降りちゃ駄目じゃないか。」

そついい、俺は宮崎ちゃんが持っていた本を2/3ほどを持ち。

「で、この本は何処に運べばいいんだい？」

「えー？せ、先生にそんな事をさせられないですう！」

宮崎ちゃんは俺から本を盗るべく手をワナワナさせているが、残念ながら本を高く掲げているため届いてない。

「ほら、ふざけてないで早く行くよ？俺は図書館の場所知らないん

だから宮崎ちゃんに案内して貰わないとわからないんだから。」

「う・・・はい」

宮崎ちゃんは諦めたようで、残りの本を抱えてとぼとぼと歩き始めた。

「そうだ。のどかちゃんってどんな本読むの？」

「え？そ、そうですね、ファンタジーやら恋愛、ミステリーと何でも読みますよ。楔先生はどんなのを読むんですか？」

図書館までの距離が有り過ぎる。そのためかのどかちゃんと世間話を少々やっていたのだが、その時に「名字はやめてくれ」と言ったら最初は困惑しながらも下の名前で呼んでくれた。

「そうだね。基本は『言葉遊び』を中心にしてる作者の作品しか読んでないね。他のはちらほらって感じだね。」

「なんだか難しそうですね。楔先生はいですね。」

「そんなことは無いよのどかちゃん。今度貸してあげるよ。そうだね、今週末にでも下宿先のキティ、エヴァの家まで来てくれたら貸

してあげるよ。」

「は、はい。ありがとうございます。」

ちなみに貸す予定の本は「戯言シリーズ」である。

そんな事を言いつつ、図書館に到着し、本を返却し、俺は下宿先のキティの家に帰ろうとしたところをのどかちゃんに止められた。

「あ、あのお、楔先生？これから予定って聞いてないんですか？」

「——へっ？」

どうやらクラスで俺の歓迎会が催されているらしい。

そしてのどかちゃんと一緒にクラスに向かい、ドアを開けると。

「ようこそ楔先生ーッ！！！」

シャンパンやクラッカーでお出迎えがあった。

俺が捻くれているから好感が持てない生徒も概ね好意的に出迎えてくれた。

「み、楔先生。どうぞ。」

のどかちゃんがシャンパンの入った紙コップを渡してきた。

「ああ、ありがとうのどかちゃん。」

そののどかちゃんに言つとクラスの女子が騒ぎだした。

「「「おおー！」」」

「本屋がもうアタックしてるぞー！」

「しかももう名前で呼びあっているぞー！」

「みんなあ！本屋を囲めえ！」

皆がみんな、のどかちゃんを囲んで騒ぎ立てている。

「み、楔先生えー！た、助けてえー！」

聞こえない聞こえない……

「おい、楔」

なんか声をかけられた気がしてむいてみるが、声がする方には誰も居なかった。

「……気のせいかな」

さて、なんかあつちに肉まんがあるから食べに行くか――

「……楔って言うてるんだよ！！無視すんなやコラァァア！！！」

「じほつ！！！」

いきなり来る衝撃。どうやら腹に何かがぶつかったらしい。まあ、わかってるんだけど。

「痛いなあ、何するんだいキティ。」

「ふん、楔が無視するからだ。バカもの。」

キティは腕を組ながら頬を膨らませながら怒っている。不謹慎だが可愛いと思ってしまった。

「で、そんな照れ隠しをしながら何か用かいキティ。俺はこれからあの肉まんを食べに行きたいんだが。」

「て、照れ隠しなんかしておらん!。」

いや、顔を赤くしながら言われても……

「え、ええとだな、この歓迎会が終わったら一度うちの地下に来てくれ。」

「分かったよ。デートの誘いには慣れてないけど、エスコート位はしてくれよ?。」

「デート……いや、舞踏会と言った方が良さそうだな。」

くつくく、と笑いながらエヴァは去っていった。

さてさて俺は肉まんでも取りに行つて来るか。

そして、肉まんを食べたり、朝倉ちゃんに色々来たれたり、早乙女ちゃんに「夏コミに楔×タカミチを出していい?。」と言われたり、古ちゃんや長瀬ちゃんに試合を挑まれたりとで、意外に早く時間が過ぎていった。

歓迎会も終わり、俺はコンビニによら大好きなジャンプとプリンを

三個買って帰る道、林の中を歩いていると。

『うーん。やっぱり何処の世界に言っても、いぬまるだし』はケツなんだね。まあ、俺はNARUTOと銀魂派だから良いんだけどね。』

『君たちはどの漫画が好きなの？桜咲ちゃんに龍宮ちゃん？』

「……………どうしてわかったんだ……………」

「私達は両方気配を消してるはずだぞ。」

林道の中の草むらの中から二人が出てきた。

『うん。完璧に気配は消してたよ。いやあ、流石だよ桜咲ちゃんに龍宮ちゃん。二人ともプロ並だよ。』

『だけどね、気配は消えてても殺気はムンムンに出てたよ？特に桜咲ちゃん。どうしたんだい？』

「……………黙れ……………私たちは忠告に、報告に来たんだ。」

『だから桜咲ちゃん殺気が出過ぎなんだって、で、報告ってなんだ

い？」

「明日の明朝、貴様とエヴァンジェリンに我々魔法教師と生徒が襲撃をかける。」

イラついている桜咲ちゃんの代わりに龍宮ちゃんが言ってくれた。

「なんでだい？俺が襲撃されるのは何となく分かるがキティが襲撃される意味がわからないんだけど。キティはもう吸血鬼じゃないんだよ？」

「それはだね先生。この襲撃の首謀者がガンドルフィーニ先生だからだよ。彼は前々からエヴァンジェリンの事を懸念視していたからね。先生を襲撃するさいについてに襲撃をしようって魂胆では無いかね？」

なある。そんなもんなのか。やっぱり奴らは『偽善』にもなりえない『征偽』だったんだね。

「ありがとうね。教えてくれて。でも良いのかい？そんな事言っちゃっても。君たちもそっち側なんだろ？俺にそんな事言っちゃったら成功率は下がるよ？」

そう言つと龍宮ちゃんは鼻で笑い。

「私たちはどちらかと言うとガンドルフィーニ先生側の『正義』、

いや『征偽』側には属してないよ。」

「……だから私たちは事を知って、球磨川先生に手を貸してあげようと思っていたんです。私もガンドルフィーニ教諭の『正義』論は頭に来ていたものが有りましたからね。」

「……なんだよ。こいつら良い奴じゃねえかよ。」

『ありがとう桜咲ちゃんに龍宮ちゃん。お礼にプリンをあげるよ。』

「「いりません。」」

なんだあ。俺は取り出していたジャンプと取り出したプリンをビニール袋を戻した。

『じゃあ、これからの事を考えるために一度キティの家に行くか。二人とも。俺に触れてくれるかな？』

そついうと二人は戸惑いながらも俺の肩に触れた。

『ん。じゃ飛ぶからね。』

そついうと俺は『アリバイブロック腑罪証明』でキティ家に移動した。

—好きな作者は東尾維新ですはい。—（後書き）

では、この作品は請負人のマイペースが仕切らせて貰いました
（。・ω・。）。

—（笑）（笑）（笑）（笑）（笑）だよね？桜咲ちゃんって（笑）（笑）（笑）

こんにちはゞ（〓＾　＾〓）ノ

好きなバカテスキャラは島田さんのマイペースです。

とりあえず言わせてもらうと、昨日まで茨城の大洗海岸に行っていたので更新が止まっていたことをお詫びします。

では、感想やらご意見お待ちしております。

では、お楽しみください。

—（笑）（笑）（笑）（笑）だよな？桜咲ちゃんって（笑）（笑）（笑）

「まったく、貴様は私が夜の誘いをしてやったというのに小娘、クラスメイトを連れてくるとは……」

『聞いてくれよキティ！プリンがなんと3つで100円だぜえ、ついつい買ってたよ』

「はあ、仮にも私はで、デートに誘ったのだぞ……少しくらい気をつかってくれても……」

『それにね。今週のONE PEACEはやっと過去編が終わってやっとバトルパートなんだよ？凄いでしょ？』

「わ、私は実は、楔と夜会ってから風呂に入ったり髪を整えたりして待ってたのに……それなのに楔はあ……」

『そう言えば、今週のアンケートは何に送ろうかな。PSPは持っているから大丈夫だとして、Wiiなんて良いかな？みんなでやろうじゃないか。』

『「・・・・・・・・・・・・・・・・ハッハッハッ！！」』

『「人の話はちゃんと聞けええ！！！」』

俺の拳とキティの拳が激突し、まわりに衝撃波が飛んだ。

『何だよ。俺が話してるのにキティは別の話をしやがって！俺の話をそんなに聞きたくないの！』

「じゃかわしい！私はただ乙女心を言ったただけだあ！それを貴様がうやむやにしおって！」

『乙女だあ？キティ、冗談言っちゃ行けないぜえ？俺は知ってるんだぜ。キティはもう人生を何回分も生きとる。つまりロリババアだつて事をな？』

「なっ！？み、楔い！貴様までそれを言うかあ！仮にも私は女の子なんだぞ。それなのに、歳のことを言っ、謝れ！！今すぐに謝れ！」

『……すいませんでした。ごめんなさい。』

『「……ガシッ。」』

俺とキティはがっちりと、抱き合った。こうやって、家族円満になつていくんだ。

「「……仲良いなあ……」」

そこに居るのは俺とキティと、俺とキティの事を引いている桜咲ちゃんに龍宮ちゃんだった。

「パクつ。……っで、貴様が言つに明日にあの『馬鹿（正義）』共が私たちに襲撃してくると?」

現在地は地下室の球体別荘の中。今の状況はテラスに座り、龍宮ちゃんと桜咲ちゃんを向かい合わせに俺と、俺の膝の上にキティが座

りながらプリンを食べている。

「はい。私と真名が調べた結果、明日の朝5時位に総動員でこの家に襲撃をかける。との事です。」

「まあ、私たちにも声はかったんだがな。さすがにガンドルフィ―二教諭の理念は余りにもやり過ぎているからな。だから私たちは今回は先生に加担しよう。勿論払うものは貰うからな。」

『うん。ありがとう二人とも。おかげで先手が撃てるよ。けど、二人は何もやらなくていいよ?』

「何故です球磨川先生? 私達では役不足とでも。・・・パクッ。」

だから桜咲ちゃんは一々殺気ださないでよ。怖いなあ。それとそのプリンは俺のだよ。

「球磨川先生。私も自慢じゃ無いが腕には自信がある。刹那だつてかの神鳴流の剣士だ。戦力としては申し分無いと思うがね。・・・・パクッ。」

龍宮ちゃんはさらつと自慢をするなあ。それとそのプリンは俺のだよ。

『そこだよ。君たち二人には力がある。つまり未来があるんだ。それを俺たちみたいなの『^{マイナス}反逆者』に加担して未来が無くなったら、それこそ君たちの教師として見逃せないよ。』

俺はキティを下ろして椅子から立ち上がり。

『まあ任せてちょうだい。君たちは遠くから観戦してくれよ。これから君たちに教鞭を振るう先生の底力つつものを見せてあげるよ。』

今の俺は主人公とは思えないような顔をしてるだろう。だけど、ここは気張るかな。先生らしく。家族らしく。そして、『過負荷』らしく。

『……パクつ。ところで桜咲ちゃん。』

「パクつ、あ、美味しい。えっ？何ですか球磨川先生？」

あれから俺たちはここから1日は出れないため茶々丸ちゃんが作ったホットケーキを食べていた。

『さつきから気になってたんだけどさあ、何で翼隠してるの?』

「!?!?!?!?!」

まったく、桜咲ちゃんは仮にも食事中なんだからあまり騒がしくしちゃいけないよ。あゝあ、紅茶零れてるって。

『それに髪の色やら、目はカラコンかな?そこまでして何してるの?最近の女の子はそこまでファッションに敏感なの?』

「・・・・・・・・何時から知っていたんですか。」

『いやいや、俺のスキルの一つで見たら何となく見えただけだよ?』

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

あれっ?なんで空気が死んでるんだ?俺なんか悪い事言っただけ。

『そこでモノは相談んだけど桜咲ちゃん。その翼見せてくれないかな?』

「・・・・・・・・それは出来ません。」

フォークを下ろして俯いている桜咲ちゃんから聞こえてくる声は弱

々しかった。

『うん。そうかいだったら桜咲ちゃんに翼を出させるために挑発してみようかな。』

「はい？そんなの無駄ですよ！たえ何を言われたところで私は――」

俺は椅子から立ち上がり、桜咲ちゃんに指をさしてこいつった。

『お前なんだか』

『良いところまで行くけど、何だかんだで負けそうな雰囲気かもしだしてるよな（笑）』

—（笑）（笑）（笑）（笑）（笑）だよな？桜咲ちゃんって（笑）（笑）（笑）

これまでは、戯言遣い（笑）のマイペースの提供でお送りしました。
（。・ω・。）

― 幸せ者（ぶらす）も嫌われ者（まいなす）も俺は味方（かぞく）だよ―（前書）
どうも、好きな『かおる』はアマガミの棚町薫で、その次に好きな『かおる』はキテレツ大百科のブタゴリラのマイペースです）。・
ω・。）

いやあ、今回は話は進みません。その代わりに萌え文とウイングゼロカスタム分が多いです。

では、感想やらご意見、お待ちしております。

ではまたのご利用をお待ちしております。

― 幸せ者（ぷらす）も嫌われ者（まいなす）も俺は味方（かぞく）だよ―

『・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・」

俺が必殺技『意味がまったく分からないがイラつく言葉』を吐くと、二人の間に静寂が駆ける。

はたから見ているキティと龍宮ちゃんはお腹を抱えながら笑うのを堪えている。

「なんつ・・・でそこまで！的確に人を傷つける台詞が使えるんですかあ！アンタはよお！！！！！！」

静寂を崩したのは桜咲ちゃんだったが。叫んだ瞬間、桜咲ちゃんの容姿が変異した。

髪の毛は黒から白に、目は黒から赤に、そして背中には四メートル位の白い翼が出てきた。

「良いところまで行くけどってそれなりに強いって事じゃねえかあ！それを侮辱風に言いやがってえ！」

「私だつてこのちゃんを守る為に頑張ってるんだよあ！」

「こんなに努力を否定されたのは初めてだ！見たいなら見せてやるよあ！」

いいね、その被害妄想まいなすは、良いぐらいに理解不能まいなすだよ。

だけど、その容姿については――

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ああ？楔先生どうしたんですか？見たい見たいと言ったから見せてあげたのに感想も無いんですか？」

桜咲ちゃんがいらつきながら言っているが。俺は言うことは決まっていた。だから俺は５メートルは離れている桜咲ちゃんに歩み寄りながら。

『・・・・・・・・カッコいい・・・カッコいいよ桜咲ちゃん。』

「・・・・えっ？」

桜咲ちゃんは口をマヌケみたいに開けながら、目を見開いている。

『まったくそんなカッコいいものを隠してるなんて勿体ないよ。まるでウイングゼロカスタムみたいじゃないか。』

『それにその髪、黒も良いけど白だって捨てたものじゃないよ？白は綺麗なイメがあるからね。』

『その赤い目だって、良いじゃないか。赤く澄んでいてまるで宝石みたいだよ。』

俺は言いながらも歩くのをやめなく、それと反比例し、桜咲ちゃんの後退りをしていく。

『ち、近寄らないで下さいみ、楔先生。わ、私は背中から羽が生えてるですよ？皆さんと違う化け物何ですよ。』

さっきまでの殺気と威勢はどこえやら、今の桜咲ちゃんは拒絶と怯え、いや、今の容姿に罵倒もなく、今まで会ってきた人間のように軽蔑の眼差しすらなく。

それはカッコいいオモチャをみた子供のような眼差しの楔に対する

拒絶感しか感じられない。

ツカツカ。

『そうかな？俺には化け物には見えないよ？どちらかと言うと天使かウイングゼロカスタムにしかみえないしね。』

俺と桜咲ちゃんの距離が零ぜろになり俺は桜咲ちゃんの頬ほに手を当て。

『ん〜。けど、こんなに柔らかいお肌だからウイングゼロカスタムじゃないなあ。やっぱり桜咲ちゃんは天使ちゃんだよ。』

微笑みながら、桜咲ちゃんの顔の下から覗き言い切った。

「て、天使なんて世辞は止めてください！私は化け物まいたすなんです。天使ぶ使らすみたいなのを言われる筋合いは……」

ガシッ。

『なら幸せ（ぷらす）になろうよ。』

俺は桜咲ちゃんを抱き寄せた。ああ、もう少し胸が……

「!!!!!!な、何を言ってるんですか襦先生！私にはそんな権利は・・・」

『そんな事言わないでよ？不幸まいたすになるのには理由が必要だけど、幸せ（ぷらす）になりたいのに、理由はいらないよ。』

『だからさ、桜咲ちゃん。言っちゃいなよ。格好付けないで、括弧を外す勢いで言っちゃいなよ。』

『幸せ（ぷらす）になりたいって。』

そういうと桜咲ちゃんは目から涙を流し、さっきまでの雰囲気とは崩れていつて弱々しく。

「・・・良いんですか。私はけものみたいな化け物わたしが幸せ（ぷらす）になっても・・・」

『くどいよ桜咲ちゃん。』

「・・・・・・・・・・そうですよ。わかりました襦先生。」

今、桜咲ちゃんが築き上げてきた自分じぶんが、自分を不幸にしようと思

つていた被害妄想が――
まいなす

――わたし、しあわせになりたいです――

――崩れていった。

そしてあれから10分後、俺たちはまたテラスに設置されている椅子に座り今度の事を話している。

「さて、楔よ。これからの事を話す前に一つ、聞きたい事がある。」

『……………なんだいキティ。俺はって、イテエ!?!?』

「楔先生。今はわたしだけを見てください。エヴァンジェリンさんの事なんか気に掛けないで、わたしに気を掛けてください。エヴァンジェリンさんも空気を読んでください。」

「言いたいのは貴様の事じゃ桜咲い！なんで貴様は楔に抱きついて
いるんだあ！」

そう。あれからずっと桜咲ちゃんは抱き付いたままだ。ううん、や
っぱり胸が……

「何を言ってるんですかエヴァンジェリンさん。私は楔先生に言わ
れて幸せになってるんです。その何処が悪いんですか。」

「だから、今から襲撃に備えて作戦を立てるにあたって、少し邪魔
なんだ。とりあえずそこを退け。」

キティが頭に十字マークをだし、あからさまに怒っている。何故だ
ろう、脇にいる茶々丸ちゃんの右手が変形して銃火器になっている
んだけど、それは醤油さしだよね？

「そんな事より楔先生。今度私と一緒に京都に行きませんか。」

「私には親と分類されるものはいませんが、このちゃんの父上、関
西呪術協会が長が私の親代わりみたいなものです。」

「よく男女が彼氏彼女が出来たら親に連絡かつ、報告するとよく本
に書いてあります。そこで、私は考えました。」

「長に楔先生を紹介したら私はもっと、幸せ（ぷらす）になれると

思っんですよ。だから私と一緒に京都に行きましょう。」

なんだろう。化け物でまいなす自意識過剰で自分勝手まいなすだけど、幸せ（ぷらす）
になるうとしようとする気持ちはプラスだよ。

ズキュン――

さっきまで桜咲ちゃんの頭、もとい桜咲ちゃんが座っていた椅子の
背もたれが粉碎していた。

その犯人は――

「桜咲さん。楔先生にそれ以上接触、または話し掛けたら貴女の頭
はその背もたれと同じ末路になります。」

キティの傍らにいた茶々丸ちゃんが右手の銃火器で発泡していた。

やっぱりそれは醤油さしじゃなかったんだね・・・。

「ああ？何してくれるんですか絡繰さん。わたし達の愛を邪魔しな
いでくださいよ。邪魔するんだつたら――」

桜咲ちゃんは傍にたまたまあった「夕凧」がいつの間にか抜き身にな
っていた。

「大丈夫です桜咲さん。貴方は絶対私には勝てません。なぜなら貴方は刃物、私はハジキだからですよ。」

茶々丸ちゃんが銃口を桜咲ちゃんに向けていった。

「おはじきですか？ふん、おはじき程度で神鳴流に喧嘩を売るとは。不笑^{わいわい}。そんな醤油さしでは勝てませんよ？」

夕風を構えなおし、いやらしい微笑みをふかべながら茶々丸ちゃんに返す桜咲さん。

「・・・・・・・・・・は、ハッハッハッ！」

「殺す！！！」

いきなり笑いだしたと思ったら、いきなり剣幕さながらの銃火器と夕風での殺陣が行われた。

『・・・・・・・・・・どうしてこうなった。』

「楔先生のせいだ。」

「楔のせいだ。」

キティと龍宮ちゃん。それは以外と心に刺さるものがあるよ。

―変身ヒーロー相手の怪人たちはもつと頭を使え―（前書き）

どうも学校に登校中に投稿するマイペースです（。・ω・。）。

いやゝ、学校が始まった所為か、投稿スピードが遅い所為かで、投稿が遅れてしまいました。

これからも頑張っ て行きますので、 よろしくお願いします。

感想やら、意見。お待ちしております。

―変身ヒーロー相手の怪人たちはもつと頭を使え―

―ドオガアン！！！！

―ズバアアアン！！

「して、楔よ。あの正義の魔法使い達はとうやって返り討ちにするつもりだ？」

『うん。そうだね。計画は決まってるけど、この計画を使うと首謀者のガンドルフィーニ先生の精神が死んじゃうんじゃないかな？』

―ガガガガガッ！！

―キンキンキンッ！！！！

「いやいや楔先生よ。あまりやり過ぎると後処理やら風評がわるくなりよ？おつと皿が割れた。」

『風評つたつて龍宮ちゃん。俺に集まる評なんてそれこそ風に吹き飛ぶくらいでしょ？そんなちっぽけな物なんかのために動かないのは死にに待つものだよ。あ、次はティーカップが割れたよ。』

「ふん。楔よ。貴様は宣告どつりあやつの娘を吸血鬼にかえるんだろ？私も悪の魔法使いを名乗っていたが、やはり貴様の前だと薄れるどころか、私が布石に見えるよ。・・・チツ、私の背もたれが壊れたぞ。」

——うおお奥義い！斬岩剣！！

——甘いです。私の正確無比な射撃には。

『何を言っているんだいキティ。俺がそんな酷い事するわけ無いじゃないか。』

『そこまでやらかしたら俺は過負荷どころかもう人間じゃあない。^{マイナス}』
『まあ、大丈夫だよ。今回の戦いを地獄に生中継LIVEをしたら閻魔様まで全裸で逃げるよ。そんな事より・・・』

俺たちはみんな紅茶をのみなから今後の事を話していた。

だけど流石に・・・

『桜咲ちゃんと茶々丸ちゃん、止めないと、そろそろ空気椅子は疲れてきたよ。』

そう。さっきからそこで、行われている桜咲ちゃんと茶々丸ちゃんの戦闘の流れ弾、流れ刀のせいで家具やら食器等が壊れていつている。

「そうしたいのは山々だが、ああなった刹那を止めるのは私には無理だよ。」

「うちの茶々丸だってああなった事がないから止め方なぞしらんぞ。」

キティやら龍宮ちゃんまでお手上げの状況。まったくなんで二人は喧嘩なんてしてるのかねえ。

まあこんな時は、あれだね。善吉ちゃんがよくめだかちゃんと怒江ちゃんが喧嘩をしてた時にやっていたあのセリフ……

『二人とも落ち着いて。喧嘩をやめてくれたら……』

そこで一旦止める。そこから先がきになるのか桜咲ちゃんと茶々丸ちゃんは動きを止めてこちらを向く。龍宮ちゃんとキティも気になるのかこちらを見ている。

そして10秒くらい焦らして俺が言ったのは――

『何でも一つ、言うこと聞くから』

「……………」

時間が止まった。その止まった時間で唯二動くのは茶々丸ちゃんに桜咲ちゃん。二人は顔を見合い、何かをアイコンタクトで了承しあったの顔を頷きあうと――

「結婚してください。」

片膝をつきながら俺に言ってきた。

『ちくしょお・・・章替えが無かったら死んでたぜえ。まったく、なんでいきなり結婚なんて言い出したんだろう?』

あれから一時間。まったく、花嫁になるまえに男性にそんな思わせ振りの事を言っちゃ駄目だろう。

『俺だって人に好かれるのに嫌悪感なんて感じないけど一応あの娘たちは中学生なんだから結婚なんてまだまだ先だよ』

『そこら辺はこれからちゃんと教えて行くな。てか、ここの生徒達は全員そんな事を言うのか？』

『まったく、これまでの教育が成ってなかったのか。けど先生の中では新田先生なんかは良かったなあ。』

『あの先生の教職者としての理念。いやあ、深く感銘を受けたね。』

俺はとある一室の中央にたたずんでいる。まわりには杖やら魔法薬、成れの果てには銃火器やら刀剣等まで転がっている部屋の真ん中に俺は居る。

『そう思いませんかガンドルフィーニ先生。あと・・・モブキャラクターさんたち？』

「き、貴様あ！何故こんな事をしているんだあ！？」

ガンドルフィーニ先生がボロボロになりながら、その周りのモブキヤラたちも既に満身創痍である。

『なんで？そんなのは決まっているじゃないですか。正義の味方^{ヒーロー}が攻めてくるんですよ？』

『だったら攻めて来る前に攻めれば良い。仮面ライダーなんか、変身する前に殺せば良いのと同じだよ。』

つまり俺が作成した作戦は攻めて来る前にガンドルフィーニ先生に攻め込めば良いんだよ。

仮にも思わないだろうよ。攻める前に攻められる。

変身する前に殺される。

必殺技を放たれる前に殺される。

決めポーズ中に殺される。

日常パート中に殺される。

そんな思いもしなかっただろう事柄に『人間』は弱いんだよ。

『それにしても見ない顔も居るねえ。
まあ俺がここに来たのは昨日だから見たことがない人がいても不思議じゃないかな？』

そういうとモブキャラ、男女、歳もバラバラだが、視線は一つ、俺に向いていて、しかも全員敵意がむき出しである。

『うわあゝ？初対面の人間にたいして敵意むき出しとか笑えないよ？
インレヒーローだけど残念。俺のスキルの一つ。『悪名君』^{インレヒーロー}ってのがあってね。』

『君たちが俺に悪意とか向けると俺の性能が上がっちゃあうんだよ？
現にさつきから撃ってる魔法。当たっても傷一つ。憑いてゝないでしょ？』

スキルの説明を受けるとモブキャラ、特に若い奴らの顔が青くなっている。

脚はガクガクと擬音が聞こえてきそうなくらい震えていて、手に持っている杖なんかは手にかいている汗の所為で滑り落ちそうになっている。

口なんかパクパクと開きっぱなしになっている。

それはそうだ。自分たちの魔法、つまり攻撃が、自分たちが向けている悪意（攻撃）によって防がれているのだから。

ちなみに何故ここにいる全員が満身創痍であるかというと、この部屋に入った瞬間『致死武器』を発動したからである。

「う、うわあああ！」

一人の男子魔法生徒が一発ではあるが、無詠唱で「魔法の射手」をうつてきた。

魔法の射手は弱々しい光を放ちながらも俺の頭に一直線に飛んで。

パンッ！

被弾した。

「や、やったあ！」

少年は自分の攻撃が頭（急所）に当てて、自分が敵を倒したと喜んでいる。

周りの魔法生徒、魔法先生も急所への攻撃が当たり、だれもが終わりかと思っていた。

『うん。その歳で無詠唱。君はあれだね、同い年の魔法生徒の中じや多分、十指に入る位の实力が有るんだろうね。』

『それにルックスも良い。つまり君は主人公にふさわしいね。才能

が有ってルックスも良い。』

『そうなるここにいる俺は所謂君の未来の為の糧、踏み台。それならここは君の未来の為にも俺は演技でもしなくちゃいけないんだろうね。』

頭に被弾した時の傷はもうない。そこに居るのは少年に歩みよる学ランの少年だった。

少年は膝から崩れ落ち、体からはシャツ越しに汗が見え、顔面は涙と鼻水が混じり訳が分からなくなっている。

『良かったじゃないか？俺みたいなラスボス級の敵を君は倒したんだよ？正に君は英雄、主人公、ヒーローなんだよ。』

『これは後世まで讃えなくちゃだね。おめでとう英雄くん。そんな君に俺から祝福を讃えて言葉を残すよ。』

歩みより、今は目の前にいる主人公。俺はそんな主人公に対して、誰からも受け入れられる笑顔でこういった。

『んなわけないじゃん（笑）』

主人公には無数の螺子がねじ込まれていた。

—大丈夫だよ。罪は全部オレがおこるよ?—（前書き）

——どうも。体調不良により学校を休み、寝過ぎて先ほど起きたマ
イペースです（。・ω・。）

学校を休むと自然と優越感に浸れるのは気のせいでしょうか？

そんな俺にメールくれるクラスメイトよ。ありがたいのだが添付画
像にエロ画像は無いだろう・・・。

感想やら意見。どんどん下さい。感想を書いてくれると作者的にも
勉強になったりテンションも上がりますのでよろしくね〃^・ω・

^〃

— 大丈夫だよ。罪は全部オレがおこるよ? —

目の前の少年、否、未来の主人公。これも否、螺子のオブジェを見てあるものは驚愕し、あるものは目を背き、あるものは怒気をこっちに撒いてくる。

一応言っておくと。

『あゝ。心配してるようなら大丈夫ですよ? ああ見えてあの螺子に殺傷性やらは無いので。みてくれだけの欠陥商品ですので。出来たオブジェも同じみてくれだけの欠陥商品ですがね。』

そいうと何人かは胸を撫で下ろした。やはり友人が無事なのは安堵なのだろう。

すると、ガンドルフィー二先生は。

「……君が今螺子でさしたのは本国からの留学生なんだ! つまり今、君は魔法世界もろともを敵に回してしまったんだよ! 君はわかっているのかあ!」

『本国？魔法世界？ああ、だからスペックが高かったのか。合点が
行きましたよ。ありがとうございますガンドルフィーニ先生。』

そういう俺の態度に敵陣営のかたがたは怒っていた。

「貴方ね！なんでそんな態度をとれるのよ！」

「そうだぞ！僕たち魔法使いがアンタに何をしたっつんだよ！」

「アンタは彼の未来を潰したんだぞ！どう落とし前付けるつもりだよ！」

各々、等々と思いがアルのだろう。

魔法使い。しかも老若男女が罵詈雑言の嵐を吹かせている。

どうやら俺は加害者のようだ。まったく、思い違いも甚だしいし、
仲間思いは華々しいよ。けど、間違いは正さないとね。

『おっと、おやおや皆様。何かお間違いございませんかね。』

ここにいる魔法使い。ガンドルフィーニまでも頭に疑問符を浮かべている。

『俺がここに来たのはあなた達魔法使いが襲撃して来ると聞いたので来ただけ。』

『攻撃したのは、俺はともかく家族であるキティや茶々丸ちゃんをも襲撃する予定だったから。だから俺は正当防衛をしたまで。』

『あれ？なにか引つ掛かりませんかねエキストラの皆さん。』

俺は部屋の真ん中で、まるで演説をするように、身振り手振りを入れながら説明をした。

『俺からは一回も攻撃をしてないんですよ。さっきの少年だって、彼から攻撃してきたのだから、ただの過剰防衛をしたまで。』

つまり、と俺が呟く。皆に、この部屋にいる魔法使いの耳に響き渡る程に、感銘を受けるように、心に響き渡る程に、小さく呟く。

さっきまでの会話。口撃を聞いてやっと気付いた人がちらほらいる。

——そう、つまり——

相手はまだ何も悪いことをしていないただの青年。

だが、そんなただの青年に自分たちは何をしたか？

話し合いでは無く、暴力による襲撃である。

カラン、ガサツ、ドサツ。

そんな音しかきこえない。自分たちのやった事を考えて戦意を喪失していった奴らから発する音である。

あるものは杖を落とし。あるものは銃火器を落とし。あるものは膝から崩れ落ち。あるものは泣き崩れ落ちと色々である。

だが、数人、五指に入るくらいの人とガンドルフィーニ先生だけはまだ何も『崩れず』『落ちて』なかった。

「……確かに僕たちがやってしまった事はやり過ぎていたかもしれない。だけどこれも正義の為なんだ！」

「そうよ！あたし達は正義の為にあなたに襲撃をしようとした。だけどそれはあなたの存在が悪かったのよ！」

「そつだ！アンタみたいなやつがこれから生きていたら被害は増加するんだよ！わかってくれよ。これは必要悪なんだよ。」

各個人が絞るように口から出てきたのはそんな言い訳だった。俺は顔に出してはいないが、ある意味驚愕している。

このごに及んで、最後の最後に、やってくれるのは必殺技でもなく、変身でも無く。助っ人の登場でも無く。

——言い訳である——

相手は正義を名乗っている魔法使い。だが、最後の最後。クライマックスシーンだよ。なのに奴らがやったのはただの言い訳である。駄目だなあ。そんなにみつともなくて、ダメで。カッコ悪くて。頭が悪そつだとさ。

『・・・・・・・・・・・・・・・・分かりましたよ。』

愛しくて、愛^{コラ}してやるたくなっちまうだろ。

『・・・・・・・・分かりましたよ。』

「……！」

何故？彼はさっきまでの凄みを無くし、弱々しく呟いた。

『あなた方は俺を襲撃。つまり私刑リンチしようとする。したんですよ。』

「……ああ、それもこれも正義の為だ。」

何故だ。もうさっきまでの殺気も。凄いまでの凄みも。螺旋込まれ
そんな感じも感じないと言っのに――

――震えていている――

皆が皆。彼を、球磨川を見て震えている。

僕たちに何をするきでも無さそうなのに見ていて、聞いていて、感
じていて、怖い。

『つまり、あのまま俺は襲撃を許したら――』

球磨川は自分の右手親指を左手で掴む。

その時にわかった。なるほど、道理で感じないわけだよ。球磨川は

僕たちになにかする気が無いわけだよ。

『——こんな事でもされてたのかな？』

そのまま勢い良くへし折りやがった。

「……！！な、何をしているんだあ！」

僕は怒気を混ぜ、そして少し心配しながら彼に言った。

だが球磨川はあっけらかんと、平然に、親友に朝の挨拶を返すように軽々しく返答をした。

『え？何ってあなた方がやりたがっていた事を代わりにやっただけですよ？』

『ほら私刑^{シンチ}って、漢字的に自分自身に刑罰をする感じじゃん？だから俺は自分に刑を執行した。』

自分自身の指を折っておいてその平然としている球磨川に全員が驚愕している。

『だけど違うよね。こんなんじゃないあなたは満足しないだろうしね』

？だから次はこの人差し指を――』

球磨川は人差し指をつかみ。

『こうしてみるかな？』

引っ込抜いた。

『次は中指と薬指を絡めて――』

球磨川は次に中指と薬指をまるで三つ編みするように絡めると。

『ねじってみたり？』

ボキボキボキボキボキッ！

捻って指から聞こえたのは碎けていく骨の音だけだった。

『そして最後の小指は、こうやって。』

小指はを突き立て床に押し当て。

『押し込んでみたり？』

押し込んだ。

『さあこれで右手は使い物になら無くなったよ？ だけどこれでも君たちは俺を許せないだろうね。』

球磨川は使い物になら無くなった右手をプラプラとこっちに見せてきた。

『だから俺は——』

そう言つと球磨川は何処からか太い螺子を出して、右手の平であてがり、自分の左肩に先つぽを付けると。

『左手もこつするよ。』

グシュグシュグシャグシャバキツバキツ——

左肩から指先まで、螺子が心柱のように突き刺さつた。否、螺子込まれた。

『ほらね。こつやつて自分で自分の自身を傷付ければあなた方は傷付けなくて済みます。』

『いわばこれは奢りだよ。俺からの一種の謝罪だよ。さあ遠慮せず

に傷付けさせてください。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『あれ？大丈夫ですか？駄目じゃん語り人が気絶したら作品が成り立たなくなっちゃうよ！？』

『全く、心の声と情景描写が聞こえない、書かれていない作品なんか誰が見るんだよ、まったく。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『まったく、仕方ないなあ。ガンドルフィーニ先生の変わりに俺が情景描写を言っておいてあげるよ？』

そう。現在のこの部屋には。満身創痍の魔法使いが気絶をされていて。満身創痍の過負荷が立っている。

『まあコレにて閉店。あばよ偽善者ども。次に会うときは必殺技。考えておくんだな。』

俺は、治った、否、無かった。事にして、完治している右手を掲げて手を振りつつこの部屋を出た。

明日でか、今日にはやることが有るんだよ。

—はぁい（はぁと）楔ちゃんは元気だぴょん！—（前書き）

こんにちは最近新しいゲームに手を出そうとはしているけど良いゲームが無く悶絶しているマイペースですはい）。・ω・。）

今回は話が進みませんが、更新します。

—はあ〜い（はあと）楔ちゃんは元気だぴょあ〜ん！—

カタカタカタカタカタ——

カチカチッ。タンッ。

『ふ〜ん。なあ。そうなんだあ。』

俺は今パソコンをそこまで速くない速度で操作をしている。

あの襲撃を襲撃仕返した後、お風呂に入ったりしてあれから、一時間。時刻は夜中の四時。

『まったく、学園のバカ共め。多分この娘、普通だったんだろうね。それをこんなになるまで放っておくなんてな。』

ディスプレイに映っているのはコスプレをしている女の子。色々な修正をされていて肌は綺麗だしスタイルもそこそこ。

ネットアイドルとして、最上位に位置すると言っても過言じゃない

カメラ写り。

だけど、消せないものが有るんだよねえ。いや、機械じゃ認識出来ないからかな。

『この目の濁りは消せないよね。ちうさん。いや、はせがわ ちさめ長谷川千雨ちゃん。』

綺麗なコスプレ。可愛い顔立ち。統制されたプロポーション。そんなのより目立つのが目の濁りだった。

ワイワイ！ガヤガヤ！

うちのクラスはいつもにぎわっている。昨日のテレビ番組を話す奴。肉まんを商売する奴。放課後の部活の事を話す奴。普通の光景に見える？

断じて私はそうは思わない。皆が皆。これを普通だと信じきっていやがる。

大学生より頭が良いクラスメイト。どデカイ刀を帯刀しているクラスメイト。ロボットのクラスメイト。どう考えても小学生にしか見えない留学生のクラスメイト。

私からみたら、異常だ。だけど、あいつらは普通だと思ってやがる。

周りがどんなに異常だろうが、私が異常と思おうが、どんなに異常な事象が起ころうが。

クラスメイトたちは、普通だと思い込んでいやがる。

「（・・・はあ。朝から滅入るなあ。今日は早退しよ。）」

キンコンカンッ！

始業のチャイム。つまり朝のホームルームの時間のチャイムが鳴り、皆が席に着くと同時に扉が開く。

新しく赴任して来た担任も変な奴だ。先生の癖に学ランを着たりして。少し捻くれているけど、なぜだか親近感が湧く。

先生が教卓の前に着くと、黒板からチョークを取り、こういった。

それが私の始まりだろう。

『ヤッホオー？今日も楔ちゃんは元気だぴょおくん！』

「「「「「.....」」」」」

俺のセリフで周りの空気が死んだ。が、俺はとまらない。

カツカツクツ。

黒板に書いているのはアルファベットと記号。現代の中学生が馴染みが深いであろう「アドレス」である。

みんながみんな見たことがないアドレスで頭に疑問符を浮かべる中一人。一人だけオデコに十字マークを浮かべている娘がいる。

強いて言うなら早乙女ちゃんも知っているのだろうか腹を抱えて笑うのを堪えていた。

「ちよっ先生これは――」

長谷川ちゃんが何か言ったのかな？ だけど悪ふざけはそろそろやめようかな。

俺は黒板消しを取りアドレスを消す。

『いや、ごめんごめん。朝見た子供番組がそんな始まり方だったから真似したくて真似したくて。』

『さっき書いたアドレスはあんまり意味は無いから忘れてね？ じゃあ、朝のホームルーム始めるよ？』

俺はそういい、朝のホームルームにて報告をした。

「ちょっと先生待ってください！」

朝のホームルームが終わり、一時間目に俺は授業が無いいため職員室で休もうとすると、廊下にて後ろから声をかけられた。

『ん？ 長谷川ちゃんどうしたんだい？ 早く一時間目の準備しなくていいの？』

「……………朝のアドレス。どういことですか……………」

『だから気にしないで良いって言ってるじゃないか。あれは俺がネットでも たまたま 見つけたアドレスだから気にしないで良いよ。』

すると、長谷川ちゃんはさっきまでとは口調を変えて、殺気まで変えて言ってきた。

「違うだろ！あれは私の作ったホームページのアドレスだろっ！何でそんな事するんだよ！？」

『ふん。あ、今のセリフ、ボイスレコーダーで録音させてもらったから。』

『それにしても昨日たまたま見たサイトがまさか長谷川ちゃんのホームページだったなんてね？』

『いやあゝ可愛すぎて可愛すぎて分からなすぎたよ。』

俺はそこですべてを包容するような笑み、微笑みから。

すべてを凍らすシニカルな笑み、冷笑を浮かべて長谷川ちゃんに言った。

『そうそう、長谷川ちゃん。俺の感覚違いだろうと思うんだけど』

『この学校って、この学園って、うちのクラスって、うちの先生陣
って、この環境って……』

『おかしくない？』

—私は、この世界を否定する—（前書き）

—はい。久しぶりにティラミスを食べてお腹が痛いマイペースです。
（。。。。）

今回の球磨川はどちらかというと『戯言遣い』みたいになってます。ていうか自分の書き方が悪いんですけどね。

感想やら意見、等々、俺と俺と俺が雁首揃えて待っています。（。。。。）

では、戯れ言まみれの戯言劇場。はじまりハジマリ。

—私は、この世界を否定する—

「・・・・・・・・へっ？」

『いやいやまあまあ、長谷川ちゃん。とぼけちゃいけないよ?』

長谷川がすつとんきょうな顔をしている。

だがそれでも、気にしないように球磨川は続けるように言い続けた。

『可笑しいと思わないかい？学園都市から出たらノーベル賞モノの物ばかり発明している学研。』

『学園都市から出たらオリンピック参加もたやすい位の運動神経持ちを持つ競技部』

『学園都市以外では絶対見れない、否、作れない、育たない、規格外のデカさを有している世界樹。』

それ以外にも、と球磨川はさも当然のように言い続けた。

その発言を聞いている長谷川は思っている。啞然としている。驚愕している。

「（・・・・・・わ、私と思ってる事が・・・・・・同じ！？）」

「せ、先生はおかしいと思うんですか・・・・・・」

長谷川は一番、自分がこの学校に来てからで一番の驚愕をしている。

なぜならこの学園の不思議を、不可思議を、規格外を、意外を、超人を、超絶を。

みんながみんな、当たり前前に思っている。

だが、初めて、始めて、この事について、異常だと思い、規格外だと思ってくれる人がいた。

『当たり前じゃないか？うちのクラスにも言えることだよ？』

『いくら何でも多過ぎる留学生。』

『サヴァン症候群並みに頭が良い留学生。』

『どこをどう見てもロボットにしか見えない女子？生徒。』

『極め付けは俺みたいに学生風情みたいな格好をしている野郎が先

生をしていることかな？」

なんだか戯れ言みたいだね。と皮肉気味に後付ける球磨川。

「（それも、私と同じ考え……）」

『俺にとってはそれらが全部、十全におかしいと思うよ。』

「……け、けど皆、おかしいとは——」

長谷川が言おうとした瞬間。

『思わないよ。』

球磨川がそう言つと長谷川は近づいて来て、球磨川の襟を掴んだ。

「………なんですか。何で皆はおかしいと思わないんですか！？………」

『えーと、その話をするには前提が必要になるんだよねえ？』

そう言つと長谷川の首を、襟を掴む力が強くなる。

「ぜ、前提って……何なんですか………」

長谷川の返答に、球磨川は真顔で、普通に、さも当然のように返答した。

『この世界には魔法がある。しかもこの学園にはそれを使える人間で溢れている。しかしそれを怪しまれ無いために結界を張っている。』

そう言つと長谷川は青ざめた顔をしながら襟から手を離して、後退りしている。

まったく、作者も下手くそな三人称なんかやんなきゃいいのにね？
最初から俺に言わせて置けば読者の皆様も読みやすくて分かりやすくて、良かっただろウ二ね？

まあメタな発言は止めておこうかな。長谷川ちゃんは後退りをしながら手を額に当てて何か考えながらぶつぶつ言っている。

多分急に色々な事を頭に入れすぎたからパニックになっているんだろう。

だったらここは先生として、先人として、過負荷の先輩として支えてあげないとね。

『あんまり考えなくても良いんだよ。所謂魔法が納得出来ないのはある意味仕方がない事なんだからね。』

『だって、海底に人魚が居る。って言われても反論できないでしょ

？ なんとって人間は海の事をまだ半分も知らないんだから。」

『宇宙に宇宙人が居る。そういわれても反論はできない。なんとって人間は宇宙を見ることはあっても行くことは出来ないんだから。』

『世界には魔法があつて魔法使いがいる。反論は？ 出来ないよ。いや、出来るはずが無いんだよ。』

『なんとってそれは右を見ながら左を見るようなもの。表に居ながら裏に行くような物なんだから。』

俺は今の前口上を聞いているかすら不安な長谷川ちゃんに近づいて肩に両手を置いた。

『だから悩まなくて良いんだよ。ただ長谷川ちゃんが知らなかっただけだったんだから。』

「……………そうだよな。きつとそうなんだろうよ。」

さっきまでの落胆し、絶望し、迷っていた顔から、だんだんと理解した顔になってきた。

それに口調まで素になっている。これは好感度が上がったかな？

「けどよ、頭では理解していてもさあ、やっぱり私みたいな理論派？ っていうか、頭ごなしに否定する人間にとってさ。あんまり鵜呑みにはしたくないんだよなあ。」

頭をぼさぼさと擬音を出しながら掻きながら呟いた。

『だったら否定すれば良い。』

「えっ？」

『何も自分が周りに合わせる必要なんてないんだぜ？』

『マラソン大会、私と一緒に走ろう？馬鹿馬鹿しい。』

『テストが平均点を取れた？阿呆らしい。』

『天上下唯我独尊、自分勝手に突っ走る。最高じゃないか！』

『他人に合わせる必要なんてないんだよ？自分を押し通せば良いんだよ。』

『否定したいんだっいたら否定しなよ？否定という否定を否定しなよ？』

つまり言うところ長谷川ちゃんは皆に合わせようとした結果がこうなんだよ？

周りの異常を常識的に否定しようとした。だけど、みんながみんな、そんな、非常識、を皆が、常識、と捉えている。

そこを自分が否定をしたらそれこそ、非常識、。ミイラ取りがなんとやらだ。

だからこらえた。我慢し、我慢し、我慢した。

そこからだろうね、欠陥、が生まれたのは。

「……はあ。まったく、私とした事が他人に言われないと解らないなんてね。」

『いやいや。分かっていたんだろうよ？理解もしてたんだろう。だけど、拒絶してただけだよ。』

俺たちは言い合つと、お互いの顔を見ながら微笑んでいた。

「ふつ。アンタ、球磨川先生は性格悪いだろ。」

『うん？どうだろうね？多分長谷川ちゃんと同じような性格だろうからどちらかと言えば良いほうだと思うよ？』

傑作だな。と長谷川ちゃんが言う。

戯れ言だよ。と俺が言う。

一時間目の授業2分前。話した時間は8分。

俺は一人の過負荷と会合した。

—駄目じゃないか—（前書き）

久しぶりに投稿。なんだか久々すぎて、つい昨日のように感じるよ。

では、長らくご無沙汰してますマイペースです（・・）ノ

この充電期間中に色々な作品を読みましたが、皆さんの球磨川君の表現は面白く、上手過ぎて書くのが怖い今日この頃ですよw（・o・）w

感想をお待ち申し上げます（・・・）意見などもどしどし書いてくださいね『はあと』

ではでは、マイペース喜劇団、開演します。

――駄目じゃないか――

その後二三長谷川ちゃんと談笑を交わして俺たちは別れた。

さっきまで目が凄く濁っていた長谷川ちゃんだったが、多分色々吹っ切れたんだろう。純粹に交ざりけなく、死んでいたなあ。

キンコンカンコンコン。

おや、どうやら始業のチャイムが成ったようだ。

確か今日の授業は・・・・・・・・・・ウチのクラスじゃん・・・

『・・・・・・・・はあ。何で忘れるのかな。自分のクラスの授業を・・・・』

誰も聞いていないのにぼやきながら職員室に授業の準備を取りに早足になりながら移動した。

「駄目です。先生は私とマスターの家族です。どんな事が起ころうと長谷川さんや桜咲さんには渡せません。」

「茶々丸さんこそふざけないで下さい。楔先生は私と一緒に幸せになるんです邪魔しないでください。」

「テメエ等こそいい加減にしろよ？先生は私の良き理解者としてそばに置いておくんだよ、テメエ等なんかにやるわけないだろ？」

「で、どうするんだ楔？あいつらがああなったのはお前の所為だからな？」

『あれ？俺ってなんかやったかな？』

一時間目の数学の準備を済ませて職員室から教室に移動するとなぜだか長谷川ちゃんと、茶々丸ちゃん、そして刹那ちゃんがなぜだか皆が皆、胸ぐらを掴みながら睨み合っていた。そしてそれをはやしたてるクラスメイトとそれを傍観している俺を煽るキティと、我がクラスながら素晴らしかった。

『まったくさあ、今日も今日とて面白いなあ（笑）』

そして俺は三人の間に入っていた。

私には気になる人がいる。

その人は突然現れて担任になりました。その人は学ランを着ていたり、年齢が高校生だったり奇想天外が形になったような先生が私のクラスの先生になった。

気になると言っても恋愛感情などでは無く、好奇心、そう好奇心があるんです。

私たちとそう歳が変わらない男性が学ランを着ながら教鞭をふるっていたら誰もがきにするであろう。

私は他の人よか好奇心が強いためか授業中は黒板より先生の方が気になるのです。

「・・・はあ、まったく放課後にうら若き中学生が思うことじゃないですね。」

こんな事考えずに早く図書館島に行こう。

そう考えて私は歩みはじめた。空は水色から朱色、夕方になりはじめていた。

ーーーーヒューーーーー

何処からか風を切っている音がする。私は音のする方向を見ている

と、人の形をした黒い物体がこちらに高速で迫ってきた。

「な、なんなんですかあああ！」

私は戸惑いはしたが、その場から飛び出し黒い物体の落下点から逃げた。

ーードゴオオオン！ーーー

さっきまで自分が立っていた場所に予測通りに黒い物体は落ちてきた。
た。

そして空からゆっくりと、翼^やや角^{かく}を生やしたお伽^{あがた}にでも出て来るであろう化け物が降りてきた。

「おーう、お嬢^{お嬢}ちゃん。さっきこーら、辺に黒い学生服を来た若造^{わくぞう}が落ちてー来^きなかつたか？」

「こらこら鬼飢^{きき}、あんたみたいな怖い顔が迫^{せま}ってきたら女の子は恐^{おそ}がってしまい、情報を聞くに聞けずに殺^{ころ}す事になるじゃないですか？」

「ええー、だつてよー、ー早くー、アイツをー、京都にー持ち帰^{かへ}りー、しないとー、頭にー、怒^{いか}られーちまうじゃー、ねえかよ翼^{よく}欲^{よく}」

どうやらこの間延びが酷い鬼が鬼飢、丁寧語の翼人が翼欲^{よく}と言っらしい。

「（って私は呑気になに考えてるでしかあ！今殺す事について言われたじゃないですか！）」

「あゝ、なあゝんだ、その穴ぼこにゝ、いたじゃんゝ、ラッキーゝ。」

「そうですね。では早くに回収いたしましょう。けど、その前に。」

翼欲は自分の翼に手を入れて、スリッと、一振りの刀を取り出した。

「なあゝ、んだゝ、結局うゝ、始末するゝ、のかよゝ、まあゝ、食えるならゝ良いけどよゝ。」

そう言い鬼飢は自分の口に手をつ込み、当たり前の如く唾液や胃液まみれの金棒を取り出した。

鮮麗されている刀と無骨過ぎる金棒。いつも図書館で読んでいるお伽噺ではよく見る、否読む物である。

一般的に生きているのなら博物館でしか見ないであろうモノばかりである。

私は後ろに後退りするが迫ってくる速度の方が断然早い。

そして一振りの刀と無骨な金棒が肉眼で確認出来るが避けられない速度で迫ってくる。

「（私は……ここで……死んじゃうのかな……）」

そして私の思考速度よりも早くに私の身体に金棒と刀は殴打し、斬殺され、惨殺されていた。

それはもう猟奇的を猟奇的に、残忍加減を残忍に、残酷な事を残酷に、いい加減を加減無しに、絶望的なまでに絶望に、頭を、右腕を、左腕を、両足を、胴体を、上半身を、下半身を、身体の細部から細部まで、撲殺され、刺殺され、惨殺され、斬殺され、瞬殺された。

けど、なぜだか、実感が無い。死んだ事なんて無いくせに死んだ心地がない。どちらかというとなんにも。そう、『何にも』『何でも』無かったように感じる。

『やあ、これはこれは夕映ちゃんじゃないか？』

『駄目だよ？好奇心が有るのは良いけど』

『可愛い女の子がこんな所に来ちゃダメだよ』

—駄目じゃないか—（後書き）

では、ここまでの提供は戯言^{たわごと}遣いのマイペースがお送りしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7339v/>

転生者は過負荷and異常のチートですはい。

2011年11月11日13時42分発行